

北落合小学校

昭和三年、国有林の直営生産（官行折伐）の拠点として北落合の清水沢に事務所が設置され、シーソラプチ川本流奥地へ伐木造材が進むこととなり、同年、木材輸送のため森林鉄道が落合から北落合の清水沢沿いに

昭和三年、国有林の直営生産（官行折伐）の拠点として北落合の清水沢に事務所が設置され、シーソラプチ川本流奥地へ伐木造材が進むこととなり、同年、木材輸送のため森林鉄道が落合から北落合の清水沢沿いに

は農場を経営体を切り替へ、第三川合農場と呼称、百数十戸の小作者が入地、農業に従事していたといわれる。大正八年（一九一九）四月一〇日、川合農場に南富良野村簡易教育所東特別教授場（現北落合小前身）が設置された。教室は川合牧場事務所の一室で、児童数二五人であった。翌九年（一九二〇）一月三〇日、第一次世界大戦終結後の経済不況が到来、北落合から多くの農民が離脱し、東特別教授場も児童の減少により閉鎖するに至った。一二年（一九二二）六月は霜害が発生、八月には空知川上流に水害が発生、惨状を呈した。翌一二年（一九二三）にも、暴風雨が襲来し被害を受け、農民は極度に困窮した。一三年（一九二四）には拳家離落し北落合には一戸も定住者はなくなり、以後荒廃に任せることとなった。

昭和三年、国有林の直営生産（官行折伐）の拠点として北落合の清水沢に事務所が設置され、シーソラプチ川本流奥地へ伐木造材が進むこととなり、同年、木材輸送のため森林鉄道が落合から北落合の清水沢沿いに

歴代学校長

代	氏名	就任年月	代	氏名	就任年月
初	荒木 助太郎	明治四一・六	五	小田島 善助	昭和二二・五
二	船川 伝十	四一・九	六	河野 重雄	二七・四
三	西田 孝邦	四二・四	七	新保 春男	三三・四
四	田中 勇	大正四・三	八	三浦 久	三六・四
兼務	田村 春司	六・五	九	笹本 吉裕	三八・一〇
初	藤 孝則	九・一	一〇	小西 初見	四三・三
二	斎藤 孝則	昭和八・三	一一	小沼 友男	四五・四
三	大森 博	二一・五	一二	石敏 雄	五〇・四
四	小野寺 誠喜	二三・二	一三	立石 敏雄	五三・四

次いで昭和五七年四月、尾岸俊明、同六〇年四月、高谷一郎、同六三年四月、飯塚博が校長に就任。

P T A 活動（事業）

- 文化教養部 研修旅行 会員研修 その他研修の計画と実施
- 施設厚生部 校地整備と除雪、ガラスふき、プール除草、ベルマーク集め
- 広報部 広報誌「めばえ」、機関誌「輪」の発行
- 生活指導部 校外生活指導 交通安全指導 家庭教育学級への協力
- 学級委員会 参観日、運動会、スキー大会への協力、卒業祝賀会の運営

歴代 P T A 会長

代	氏名	代	氏名	代	氏名
初	寺西 武雄	四	寺西 武雄	七	加藤 理吉
二	大塚安次郎	五	津田 要	八	中井 武男
三	千葉久雄	六	高谷幸次郎	九	奥田 友吉
				一〇	渋谷 豊作
				一一	加藤 理吉
				一二	津田 保治

次いで平野清司（一三三）、奥田貞治（一四四）、渋谷英之（一五五）、大和政秋（一六六）が会長に就任。北落合小学校 明治三四年（一九〇一）九月一日、富良野村簡易教育所（現落合小前身）が創設、同月三日には、待望の官設鉄道十勝線が落合駅まで開通し、道央、道東を結ぶ交通の要衝として、落合は世間の注目を浴びるところとなった。引続き十勝線狩勝隧道の難工事が控え、多数の土工が入り込み、加えて造材人夫の入地があり、鉄道機関庫の設置、マッチ工場、旅館、運送店、商店などの開業が続き、落合は経済流通の拠点としても、急速な進展がみられた。三六年（一九〇三）九月一日は、下富良野村戸長役場が創設、当地方もこの管轄に入った。この時期、落合集落における拓殖の進行は、北落合にまで伸び、木戸牧場の開設をみ、これにより当地開発の先鞭がつけられたのである。明治四一年（一九〇八）四月一日、南富良野村外一ヶ村戸長役場が創設した。翌四二年（一九〇九）における落合の木材産出高は約三〇万石で、小樽、室蘭、砂川及び各炭山へ移出され、造材は活況を呈した。四四年（一九一一）七月八日には、伊藤組落合木工場の創業をみた。大正二年（一九一三）に、川合嘉十が城戸牧場を貰い受けて継承し、川合牧場を経営した。翌三年（一九一四）には、石黒三代治が落合奥のシーソラプチ上流に石黒農場を創設し、開墾を始めた。五年（一九一六）、第一次世界大戦に伴う豆景気により、川合牧場

は農場を経営体を切り替へ、第三川合農場と呼称、百数十戸の小作者が入地、農業に従事していたといわれる。

同九年、第三代村長村瀬源太郎は、荒廃化した北落合の再開発のため、川合農場主（川合倉吉）と図り、自作農創設を前提として開発し、再び農地とすることで承を得た。一〇年、第四代村長丹野助七と川合農場主の相互協力と努力の結果、開墾が始まったのである。翌一一年四月下旬、児玉佐吉を団長とする神川自作農既成組合員二十数戸が入地した。入地式は同年六月一〇日、落合川合農場事務所において挙行された。これら入地者の学齢児童の教育のため、昭和一一年一月一七日に北落合尋常小学校が開校された。仮校舎は川合農場主川合倉吉の寄付による青年会館を使用、同年一月一七日に開校式が行われ、最初の在籍児童は二一人（後一五人）、一学級編成であった。翌一二年は一学級編成二〇人となり、一六年三月一日、国民学校令が公布、四月一日から北落合国民学校と改称、初等科一学級編成であった。二〇年八月一五日には太平洋戦争が終結した。この年に北落合高台地区へ開拓入植した農家は、飲料水不足などその劣悪な各種条件のため離落し九戸のみが残った。

以下、戦後における本校沿革の概要を記すと、次のとおりである（『しらかば』北落合小学校開校五十年記念誌）。

昭和二年 四月一日に六・三制が施行、北落合小学校と改称。一学級編

なお、六二年度は三学級（二五人）、六三年度は三学級（二一人）である。

年 度	組	児童数	年 度	組	児童数	年 度	組	児童数
大 正 八		二五	昭 和 三		一五	昭 和 三 六		二
一		一五	二		一八	三		二
二		二〇	三		一三	三		四
三		二七	四		一一	三		四
四		三三	五		一〇	四		三
五		二六	六		一一	四		三
六		三一	七		二二	四		三
七		三〇	八		二六	四		三
八		一八	九		二二	四		三
九		一九	一〇		二六	四		三
〇		二二	一一		五一	四		三
一		二二	一二		六〇	四		三
二		二二	一三		六一	四		三
三		二二	一四		五八	四		三
四		二〇	一五		五六	四		三
			一六		五五	四		三
			一七		五五	四		三
			一八		五五	四		三
			一九		五五	四		三
			二〇		五五	四		三
			二一		五五	四		三
			二二		六一	四		三
			二三		二八	四		三
			二四		二二	四		三
			二五		二二	四		三
			二六		二二	四		三
			二七		二二	四		三
			二八		二二	四		三
			二九		二二	四		三
			三〇		二二	四		三
			三一		二二	四		三
			三二		二二	四		三
			三三		二二	四		三
			三四		二二	四		三
			三五		二二	四		三
			三六		二二	四		三
			三七		二二	四		三
			三八		二二	四		三
			三九		二二	四		三
			四〇		二二	四		三
			四一		二二	四		三
			四二		二二	四		三
			四三		二二	四		三
			四四		二二	四		三
			四五		二二	四		三
			四六		二二	四		三
			四七		二二	四		三
			四八		二二	四		三
			四九		二二	四		三
			五〇		二二	四		三
			五一		二二	四		三
			五二		二二	四		三
			五三		二二	四		三
			五四		二二	四		三
			五五		二二	四		三
			五六		二二	四		三
			五七		二二	四		三
			五八		二二	四		三
			五九		二二	四		三
			六〇		二二	四		三
			六一		二二	四		三
			六二		二二	四		三
			六三		二二	四		三
			六四		二二	四		三
			六五		二二	四		三
			六六		二二	四		三
			六七		二二	四		三
			六八		二二	四		三
			六九		二二	四		三
			七〇		二二	四		三
			七一		二二	四		三
			七二		二二	四		三
			七三		二二	四		三
			七四		二二	四		三
			七五		二二	四		三
			七六		二二	四		三
			七七		二二	四		三
			七八		二二	四		三
			七九		二二	四		三
			八〇		二二	四		三
			八一		二二	四		三
			八二		二二	四		三
			八三		二二	四		三
			八四		二二	四		三
			八五		二二	四		三
			八六		二二	四		三
			八七		二二	四		三
			八八		二二	四		三
			八九		二二	四		三
			九〇		二二	四		三
			九一		二二	四		三
			九二		二二	四		三
			九三		二二	四		三
			九四		二二	四		三
			九五		二二	四		三
			九六		二二	四		三
			九七		二二	四		三
			九八		二二	四		三
			九九		二二	四		三
			一〇〇		二二	四		三

学級数・児童数の推移

同六一年 開校五十周年記念式典挙行。
同六二年 樹木体験学習の森造成。
教育目標 心豊かな主体的な子どもの育成
一、強じんな体力と盛んな開拓精神を持った実践力ある子どもの育成

資料「北落合小学校資料」

二、自主・自律の精神と責任感のある子どもの育成
三、勤労をよるこび生産に科学する子どもの育成
四、情操を豊かに生活をじゅん化していく子どもの育成

成。同校PTA発足。
同二三年 北落合地区開拓を道議会に要願。
同二四年 この地域の開発振興に貢献した川合農場が終末を告げた。道農地委員会が北落合地区の買収計画を告示。
同二八年 佐藤吉夫外入植、戦後開拓が開始。この年一月十五日、中学校の委託授業を開始。
同二九年 北落合総合開発計画施行により、ブロック住宅建築が開始。
同三〇年 七月一日、落合中学校北落合分校を併置（生徒数二〇人）。二月二六日、新校舎が中央地区（現住所）に落成し移転、校長住宅も新築。
同三一年 一〇月三日、校舎を増築。
同三二年 五月一日、二学級編成。一月二八日、教員住宅一棟を新築。同月二五日、風力発電施設が完成。
同三三年 五月一日、三学級編成となる。一月一日、定時気象観測を開始。
同三四年 四月一日、併置の北落合分校が、北落合中学校として独立（生徒数二四人）。一〇月二四日、教員住宅一棟二戸を新築、同月三〇日、当校に公衆電話が架設。この年、幾寅・北落合間の道路が完成。
同三五年 一月十五日、体育館（へき地集会所・六〇坪）が新築。同年、婦人ホームが落成。
同三七年 東幾寅地区にモデル開拓地が造成、七戸が入植。
同三八年 五月一日、三学級編成となる。五月二三日、NHK「風車のある学校」としてTVで放映。六月二四日、教室を増築、七月一〇日には校長住宅を増築、同年、北落合地区に電気を導入。
同三九年 六月一八日、学校放送施設が完成。七月一日、手洗い水呑場が完成。

同四〇年 四月一日、北落合中学校が幾寅中学校に統合する。
同四一年 五月一日、四学級を編成。開校三十周年記念式典を挙行。一月三〇日、記念植樹を実施。北落合全地域に有線放送施設を整備。
同四二年 五月一日、三学級編成。同日、校章を制定。同月一〇日、校歌を制定。学校文集「しらかば」を創刊。オンコの太木で校門建立。この年四月一日町制が施行。
同四三年 五月一日、全町の字名改正により「北落合」の呼称が決定。同月二五日、落合拡張地区国営パイロット事業起工式が挙行された。
同四五年 一月三十一日〜二月一日、大雪により北落合地区六〇戸孤立状態となり、自衛隊が救援に出動。一〇月一〇日「山奥の学校の体力づくり」が、北海道新聞により報道。
同四六年 暴風雪のため臨時休業七日に及ぶ。上川支庁管内教育実践奨励賞を受賞。離農が目立つ。
同五一年 九月一、二日、開校四十周年記念式典、事業を執行。記念誌「しらかば」二〇号を発刊。
同五二年 四月一日、二学級編成。HBC子ども音楽コンクールに参加、優良賞を受賞。
同五六年 八月二三日、台風一五号により体育館が倒壊。
同五七年 七月、体育館復旧落成。
同五八年 三月一〇日、北海道教育実践研究論文に応募、「研究報告書」にその概要が掲載される。一月一九日、北落合開拓三十周年記念式典挙行。
同三九年 一〇月一九日、教職員住宅が落成。
同六〇年 五月一日、三学級編成（一三人）となる九月二三日、校長室兼保健室を設置。

歴代学校長

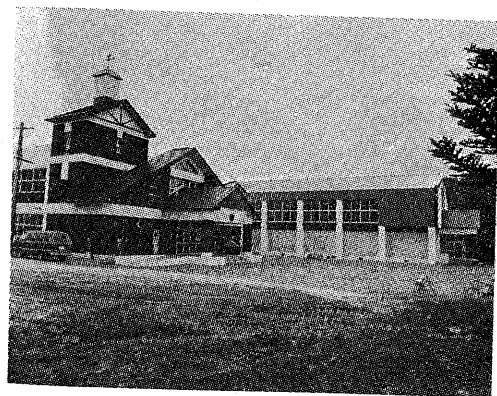
代	氏名	就任年月	代	氏名	就任年月
一	松村武雄	昭和一一・一一	九	加藤常吉	昭和四二・四
二	栗城登	一三・一二	一〇	宮下修一	四五・四
三	松村武雄	一五・四	一一	国忠敬二	五〇・四
四	妹尾和悦	二〇・五	一二	水戸部登久三	五三・四
五	鈴木要	二三・四	一三	関口利男	五七・四
六	本谷善吉	三〇・六	一四	片岡達哉	六〇・四
七	高橋春雄	三三・四	一五	星野学	六三・四
八	小野寺誠喜	三七・四			

PTA活動(事業)

- 一、会員研修の推進・積極的参加
- 二、各種学校行事への参加協力援助
- 三、学校環境整備への協力
- 四、校外指導・交通安全教育と地域子ども会の育成
- 五、スポーツ活動の推進
- 六、その他 道PTA互助会加入他

歴代PTA会長

代	氏名	就任年代	氏名	就任年代	氏名	就任年代
一	三ヶ田源次郎	昭和二二	五坂井 定雄	昭和二八	九菊池 富夫	昭和五〇
二	松井 与四松	二三	三ヶ田源次郎	二九	一〇久保田末五郎	五四
三	坂井 久男	二五	七大道 清次郎	三六	一岩永 広一郎	六〇
四	三ヶ田源次郎	二七	八梅林 毅	四二	二二大道 重治	六三



東鹿越小学校

昭和二十二年一月一日、この通学難を早期に解消するため、地域住民の総意により東鹿越小学校建設期成会(会長藤野巳代吉)を結成、同月一七日、期成会名により村長に対し東鹿越小学校新設について、陳情書を提出するなど積極的な設置運動を展開、遂に住民の熱意に打たれた村当局の認めるところとなった。一三年一月二十九日、東鹿越小学校設置の件が村議会で可決され、三月三十一日には開校の認可をみたのであった。五月八日、日鉄鉱業株式会社所有の日鉄会館を借用、仮校舎の整備を行った。一方、七月一日には鹿越小学校から東鹿越小学校へ転校する児童の離別式が行われ、同日、仮

校舎において二学級編成により授業が始められ、同月五日に開校式が挙行され、住民の喜びは一入なるものがあつた。

以下、本校沿革の概要を記すと、次のとおりである(『学校要覧』昭和三三年、『東鹿越小学校沿革』)。

昭和三年 九月一日、三学級編成。同日、王子株式会社から学校敷地として無償貸与の件が成立(校地二町歩)。一〇月二三日、屋外運動場敷地に着手(二四年六月二七日完成)。

同五年 一月二六日、東鹿越小学校建設期成会を結成(新校舎建設のため)。三月三十一日、四学級編成認可。八月三十一日、本校新築の件を村議会で議決。

同六年 五月一九日、起工地鎮祭を執行、校舎新築工事に着手。八月二〇日、新校舎落成(校地総坪数は仮校舎一三二坪、新校舎四教室、職員室等一六四坪、屋外運動場一八〇〇坪、実習地六〇坪、その他三三三二坪)。同月二八日、仮校舎から新校舎へ移転。十一月五日、水道施設工事に着手、二月一七日完成。

同七年 一月一〇日、電灯工事完成。
同八年 七月一六日、校旗制定(P.T.A有志寄贈)。同月一九日、開校五周年記念式典を挙行。校内放送施設を整備。
同三〇年 五月九日、五学級編成となる。一一月二三日、公営ブロック住宅へ教員全員が入居。

同三一年 九月一日、校舎増築工事着手。一〇月二〇日、炊事場、石炭庫を新設。同月二八日、二教室連続工事完成。一一月二〇日、校舎増築工事完成。教員住宅風呂場新設。一一月二六日、日鉄株式会社使用電話から一三番乙として本校に電話設置。

同三二年 四月一〇日、屋内運動場建設期成会を結成、村当局等へ建設方を要請。九月二〇日、屋内運動場建設工事に着手、一一月二四日、前記工事の落成式を挙行。
同三三年 五月三〇日、六学級を編成。一一月二〇日、校内放送施設を整備、本校同窓会設立。開校十周年記念式典を挙行。
同三八年 一月一九日、体育館ステージを増築。
同四一年 三月三十一日、金山ダム建設に伴い鹿越小学校が閉校、本校へ統合。

同四二年 四月一日、町制施行により本校は町立となった。
同四三年 一〇月一三日、開校二十周年記念式典を挙行。
同四四年 五月一日、五学級編成。八月二三日、水泳プールを設置。一一月三〇日、屋外体育用具庫、遊具施設を設置。
同四五年 一一月二二日、上川管内環境美化奨励賞を受賞。
同四七年 二月八日、上川管内環境美化実践優良賞受賞の栄に輝く。
同四九年 二月八日、体力づくり実践研究を発表。

同五〇年 五月一日、三学級編成。児童減少。
同五一年 四月一日、文部省道徳教育協同研究推進校に指定される(五二年度まで)。
同五三年 一〇月一日、開校三十周年記念式典挙行
同五八年 九月二六日、放送施設新規入替実施。
同五九年 七月、プール全面改修施工。

同六一年 一一月、校舎新築落成。三学級編成、児童数一八人となる。
同六二年 九月、グラウンド造成。

教育目標
一、健康な心身と強い意志を持つ子ども